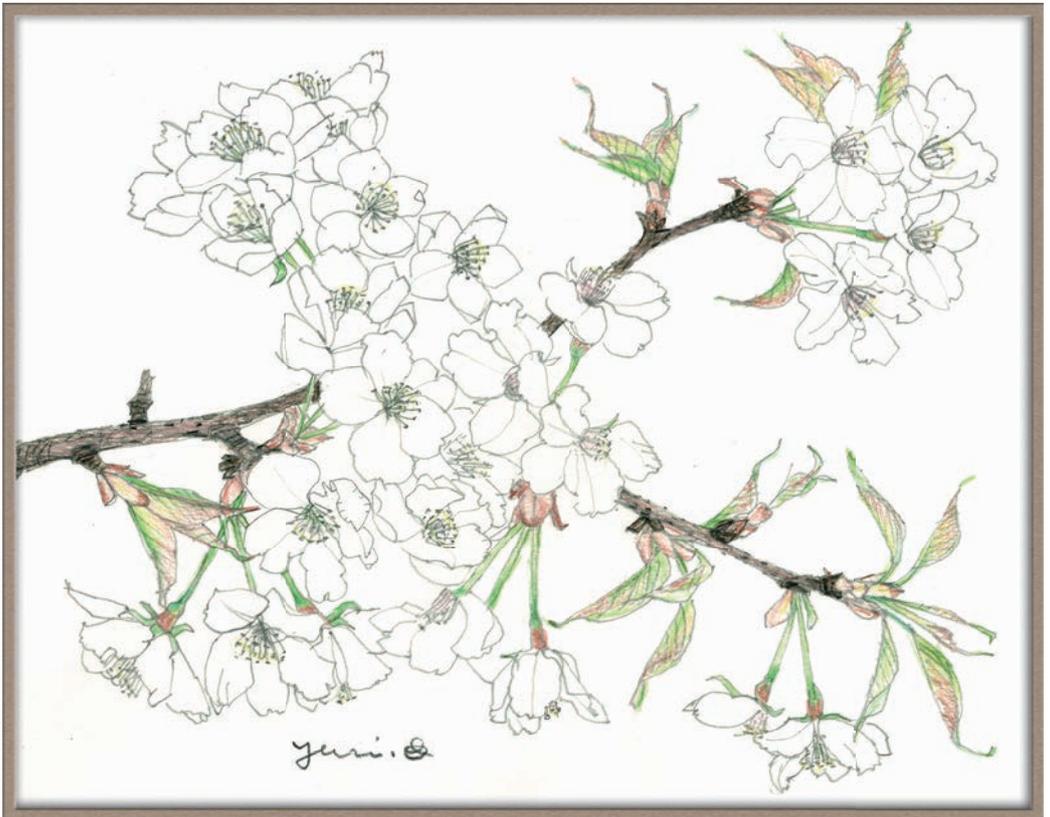


三河アララギ

平成三十年 2018年

四月号

第六十五卷 第四号



ニューヨーク日記(138) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

ロックフェラーセンター

Blue Shoe Diaries



ShoeLady夏服ショッピング!彼女のお気に入りのSaks Fifth Avenueデパートに付いて来たんだけどやっぱり腹が減っては戦は出来ぬ!ってことでデパートの中にあるカフェでロックフェラーセンター眺めながらワイン付きの腹ごしらえしていたらお買い物めんどくさくなっちゃた。。。。

ShoeLady needs a summer wardrobe so we're at Saks shopping. But one must eat! So we're lunching at their cafe with a glass of wine. Now feeling a little tipsy, I'm definitely too lazy to tag along. ShoeLady, I'll be here, come pick me up when you're done! Ciao ciao!

目次

第六十五卷第四号(通卷七七二号)

表紙・山桜	今泉 由利(1)	山崎 俊子(24)	山元 正規(33)
ニューヨーク日記(138)	Blue Shoe(2)	三田美奈子(24)	田中 清秀(33)
黄素馨の門	御津 磯夫(4)	水野 絹子(24)	浜田 紀政(33)
三河アララギ歌集Ⅶ	大須賀寿恵(5)	牧原 規恵(24)	松本 周二(34)
歌集「續草々」	今泉 米子(6)	稲吉 友江(25)	今泉 由利(34)
三河アララギ歌集Ⅶ	河原 静誠(7)	鈴木美耶子(25)	今泉 如雲(35)
如月の夜	岡本八千代(8)	吉見 幸子(25)	植村 公女(35)
天文学	今泉 由利(10)	牧原 正枝(25)	田中 清秀(36)
月食	弓谷 久子(11)	石田 文子(25)	かさね吟行会
やぶ椿	安藤 和代(12)	現代学生百人一首	『酔いの徒然』(72)
故郷	清澤 範子(13)	東洋大学	ある自然科学者の手記(71)
「そだね」	伊藤 忠男(14)	大谷 将和(26)	「江上浩二の独り言」
天平の	森岡 陽子(15)	物井 晴紀(26)	絹の話(89)
菫	足立 晴代(16)	村山 勇大(26)	楽しい時間(65)
冬季オリンピック	阿部 淑子(17)	福住 麻友(26)	漢詩研修(十八)
敦賀路	白井 信昭(18)	佐々木優果(27)	『歴代天皇御製歌』(八十七)
叔母	杉浦恵美子(19)	草野 夏央(27)	貫名海屋資料館(50)
厄除け餅	山口千恵子(20)	大久保龍成(27)	土偶(5)
こももの事	夏目 勝弘(21)	佐藤 友香(27)	「氷魚のことから(207)
歌集「夢のつづき」	水上 信子(22)	鮫島 満(28)	みなさまへ⑪⑫
「啄木歌集」大正十二年十月二十五日	紅玉堂書店(23)	津之地直一(29)	編集室だより(二〇一八年二月)
『ことよせ』	いーはとぶ	高橋 育郎(30)	野菜・まんだら(2)
森 厚子(24)	『俳句』	柳田 皓一(32)	三河アララギ(58)
		山迫 京子(32)	森岡・今泉(59)
		森岡 陽子(32)	三河アララギについて(60)

黄素馨の門(昭和四十一年〜昭和四十四年) 御津磯夫

宮山の礎めぐる赤松に近江茸山の標繩のころ

雌松低^{しもと}き楛^こ枯山ぬれしづみ礎石のみなる紫^{しがら}香^き樂の宮

ほろぼしし神の炎か信楽の山にちりぼふ布目瓦片

鐘いくたび鳴りて山の間^まに消えゆきしあとに柱の石ののこりぬ

いまはただ石の佛のかたち融けて河原の礫^{いし}と露かわきゆく

奥嵯峨の竹の林の空氣にはほひこもれりゆうべの雪の

つくりたるもののかたちは消えゆかむこころおさへて立ちかへるべし

止まるものなき中にしてひとりあり若きわが子のいのちとどめよ

たまきはるいのちあやふき子をおきて屋上はしる音なき吹雪

よりどなきこの病棟の白き廊ゆきもどる一日二日また三日あれ

三河アララギ歌集Ⅶ

大須賀寿恵

わが足の萎えは今更いまさらにして足指分けつつ皮草履はく
暑かりし一日暮れつつ誰もぬ居間にも蚊遣りの煙ながるる
梅雨空をま白き千切れ雲ひとつ静かに流れつつ融けてゆきたり
犬槿の花散り終りてあたらしき緑の細葉小僧見えはじめたり
蒼く澄み透れる今朝の天空を翔びゆくものなきはよろしも
縁どりてきらきらと今朝の霜白しほとけのざまたはこべらの上
今日一日おだやかならむと思ひつつ一人歩めり霜厚き朝
さわがしきまでに囀る声のしてきさらぎ雲雀は枯草の中
何といふことあらねども夕べ早く飯を終へつつ心足りゐる
松の緑すすくすく伸び立つ春の日の今日より成は中学一年生

歌集 「續草々」

今 泉 米 子

使ひしは一二度ならむ染付の古伊萬里の大き皿二十枚

古伊萬里の洞庭山水の大皿に尾頭付きを昔盛りにき

取り出して見しむる中に二百年傳へて黒き建蓋天目

唐草に魚文の碗は金欄手かがやく截箔を教へたまへり

釋きものみな帰りたり用心碑に蜜柑も一つ供へられをり

争ひつつ拾ひ集めし松ぼつくり置き去られゐて恆の日となる

植込みの中をゆきつつたまたまに蠟梅の花のにはへるところ

すくすくと青立ち揃ふ苦竹^{まだけ}蕪風こもりつつたもつ静けさ

黄に透る丸金柑の甘煮あり少しづつへりて二月となりぬ

をさなきが捧げてくれしほとけのざ厨の棚に久しく保つ

三河アララギ歌集Ⅶ

河原静誠

木の芽雨吾が老櫨にそそぎをり日毎におとろふ吾老櫨に

衰へたる吾が境内の老櫨にけふより焼杉の太き支柱を

園児等の競ひて飛ばしたる紙飛行機の一つが境内の櫨の木の枝に

娑羅双樹の花は真白く落ち敷きぬ春の椿に似たる其の花

風花の舞ふ影黒く映りたり暫し眼を上ぐる針を止めて

法然上人勅修御伝をひもとける窓赤々と冬の夕映え

移り早き日射し追ひつつグレーの糸に大黒頭巾をわれは編みゆく

流れ遅き冬雲を吾は憎みをり窓近くに寄りて足袋を繕ふ

御本尊に沈香を炷きてこの年の年回表を吾が書きはじめ

大恩寺の御忌会の会座に加はりて五体投地の礼拝をしぬ

如月の夜きげつひらのよ

蒲郡 岡本八千代

いつしかにはや如月の夜となり夜空は去年こぞと変りなきごと

父逝きてその娘この二人ふたりと母われと三人みたりの如月の夜は更けつつ

ひとり啜すする今朝のあつあつの茶の湯気をほのかに頬ほほに受けつつ春みをり

冬バラの花も老いつつ庭の中その花片びらの白きおんぼろ

冬ばらの花もいつしかおとろへて淋しく静かに咲きてゐるかな

紅馬酔木べにあしびの花房風にゆれてをり昨年をとしの如去年ごとこその如くに

やうやうに庭に立ちゐて見上げたるけふの深空みの淡き青空

わが留守に屈きてゐたり注文の「おらおらでひとりいぐも」の本が

本のカバーに大きな文字に書いてあり「この先一人でこまったあどうすんべえ」と

オレンジ色淡く小さきメダカひと一つわが水瓶に生きてゐるゐる

たしかなる一つの小さきメダカ見て心安けしけふもわたくし

わがメダカメダカよメダカひとりぼっちお前と私の二人ぼっち

けふありて昨日のことを思ふなり見上げし空はもはや夕茜

海に低く地柄ちがらの方に夕茜けふのわたしの一日ひとは暮れつつ

一日ひとの今今を暮らしつつありて或る時は自づと涙ぐみつつ

天文学

東京 今泉 由利

自然との調和している心地してメタセコイアの冬枯れのもと
完成というもの何もたぬまま未完のままのそのままるたり

地球より八〇〇〇万光年離るとそんな事情も受け入れて今朝
宇宙なる模擬遊泳の蘇^{よみがえ}るファースト・スターを追ひかけたりき

鉢植のコーヒーの木と日向ぼこ午後の日長く居間に至れる

冬枯れの桜並木をゆくときは花の吹雪を思ひえがきて

三宝寺池の湧水流れ流れ私を過ぎる隅田川へと

東京薬科大学へもゆきしことカカオの結実黄色くありき

地球上のドーナツの形してブラックホールを取り巻くガスは

地球より天文学の距離にしてブラックホールの実映像よ

月食

豊川 弓谷 久子

昔話が心よぎりぬ月食の赤銅色の月仰ぎつつ

みさとより京都の土産が届きたり学生生活最後の旅か

おばあちゃんへと添書のあり京土産小さき缶は御所の福飴

東山三十六峰一望に収めて来しか京都タワーより

嵐山嵯峨野竹林今宮神社共に歩きし日を思ひをり

山畑に鋤振る姿思ひをり丹精こめし野菜いただく

大根も蕪も余りに可愛くて食べるに欲しと言ひつつ食みぬ

立春も雨水も寒きまま過ぎて今朝はかすかに春の気配す

裸木となりし紫陽花枝先に固き芽しつかり育くみてをり

父逝きしは半世紀前の如月の尽なま暖かき夜なりき

やぶ椿

豊川 安藤 和代

サンタさんくれしマフラーぎゅっとしめ軽やかに行く朝の散歩

葉の陰にひっそりと咲くやぶ椿ひかえめに生きし亡き母想う

遠くとおくアルプス雪山三角が本宮山を呼ぶように見ゆ

幼き日石けりをせし寺庭よ誘う人もなし山茶花の散る

長男の嫁と言うだけで苦勞したと語るる友の笑顔さわやか

花もなき如月の庭ひと所千両の実のひとときわ光る

すぐそこに来ている様で来ない春桜草もまだ蕾も見えず

高らかな児等の笑いを窓に聞き吾もつられて笑っていたり

義姉から届きし新茶部屋内に里の香りすやさし香りす

生くるとは強であれ玉葱も厨のすみであおき芽を出す

故郷

春日井 清澤 範子

半月の空は茜に染りくる庭の椿に夕陽照らすも

向き合ひて蓄付くなり吾が庭の椿は大輪の花咲かせたり

二月の陽は三寒四温と云ふけれど今日の寒さに故母のセーター

園芸店にて買ひ植えるなりラナンキュラス赤白黄色陶器の鉢に

運動不足なりと歩きぬ杖つきてまわり廊下を行きつ戻りつ

テレビ体操につま先立ちする動作には転びてしまふ足の弱さよ

故郷の穂高の新年の雑煮には鰯と大根を入れて煮たりき

スーパーへの二キロの道をかせとして自転車を押し吾は歩きぬ

眠るまで今日の出来事思ひをり吾最善を尽し来にけり

日曜日朝市にて買ひたる人参を大根を娘の車につみ込む

「そだね」

大阪 伊藤 忠 男

裏山は芽膨らみて鶯を待つのみなりや里の我が家

笹舟を浮かべ遊びし童たち無邪気さ今も変わりなしなり

峠越え開けた台地震む山昔ながらの瓦家続く

念願の南廊下に西陽よけサッシ切り替え終の棲家に

終活は捨てることとてあれもこれも懐かしゴミ忍びなし

造りつけ倉庫建て増し思い出を残すは無駄と分かってはいても

ガン手術五年が経ちて卒業す日々に衰え目立つとしても

悩むこと無駄なりとの医師の言病は無心天に任せと

ここに投げこれを弾きてここに付け弾む笑顔に「そだね」と返す

寒さあり風が舞う中競技する公平欠きたオリンピックピクナリ

天平の

東京 森岡陽子

紅色の老梅の枝に雪は降る一つ一つの蕾につもる

しんしんと静かに静かに雪は降る東京の音消され行く時

雲が割れスーパームーンの姿見る地球に隠るる暗赤色成る

春迎ふ南南東の恵方向き黙黙食す太巻き一本

立春の太陽のもとぬくぬくも夕迎迎ふは寒々寒し

毎夜ごと入浴剤の源泉に今夜は草津明日は別府に

追善と供養の為にと納めをる板碑いたび見守る千体地藏

三宝寺まだまだ残る春の雪手水舎あたり薄氷はる

浮島と浮葉のまわり鳥達は追いかけて羽ばたき逃げる羽ばたく

天平の千手観音美しき千の慈手じげんにそなふ慈眼

蕾

東京 足立晴代

舞う雪の積りきたれる銀世界陽だまりに集う鳥のさえすり

空澄みてたゞよう香りふくよかにほころびはじめ蕾を見あぐ

銀の舞う天見上げつつ過す日々暖かき陽だまり待ちこがれたり

風流れ花の香満つる季を待つ指折かぞえいついつか

五輪の輪色とりどりに戦ひて笑顔美しくそれぞれに

メダリスト晴々としてさわやかに眼輝きて未来を夢みる

若人の精気あふれる五輪の輪時代を負うて勇み足

梅の香も雪ふる日々におとろえて陽ざしを待ちて待ちているいる

桃の花ひなも待ち居る祭の日早く早くと急く心に

流行の病みごとは敵中し日々薬にてゆつくり養生

冬季オリンピック
横浜 阿部 淑子

女子五百五輪新での金メダルフォームの工夫報われし小平

フィギュア男子羽生連覇の金メダル頑張りし足に感謝の^{いたわ}り

追い抜きの女子のスケートはワンライン磨き抜かれて圧巻の金

春を待つどうだんつつじの生け垣は新芽を支う小枝艶増す

大井町のホームに流れる名曲はビバルデイの四季今正に春

敦賀路

豊川 白井 信昭

北風の吹き荒べる角口の日本水仙花茎おれず

雨だれの一粒一粒窓越しに滴り落つる地境狭庭

御堂山の尾根伝い行くここより薬草の宝庫砥神山とぞ

頂に三河の海の照り陰り遠く霞める伊良湖の島辺

渋滞の北陸自動車道いつしかに除雪車の後つき従えり

福井なる山幾つ越えき北陸道しき降る雪に華やぐ樹氷

山せまる北前船の寄港地と河野海岸館やかたの集落

海のぞむ駐車場のなか実物に復元されたる千石船あり

雪残る敦賀の街を通り行く気比の松原かいま見えつつ

渋滞の後れに後れ妻と我車乗り換え帰り来たれり

叔母

蒲郡 杉浦恵美子

冬枯れの知多半島を飛ばしをり一年半ぶり叔母に逢ふため

叔母さんと呼び恵美ちゃんと呼びくれる何気なけれど永久にはあらず

この叔母が唯一の人となりにけり我が誕生に立ち会ふ身内の

この叔母は八十六年故郷を離れしことなし知多弁のままに

若き日の母のことなどぼつぼつと叔母が語りぬ脈絡なけれど

万葉に立ち徘徊るてふ語を見つくこの歳にして初めて知れり

未だ我が知らぬ語随分あるらしいこんな発見一寸楽しい

知らぬこと知ろうとすること恐らくは夫の居ぬ世に生きる張合い

知らぬ街バス停に佇つ午後遅きバスは何時来る雪降りしきる

小牧から岩倉行きのバスに乗れど我が頭には地図も浮かばず

厄除け餅

蒲郡 山口千恵子

山菜莢の未だ固き茗付く剪定枝拾ひてバケツに浸す

みのりたる金柑の実を喰ひにくる鶉今日も二羽姦し

出窓には冬の朝日さし込みてガラスの鉢のメダカすいすい

しとしとと寒の雨降る終日を雪にはならずこの三河の地

アスファルトの窪みに溜る冬の雨今朝は厚き氷になりゐる

ずっしりと重き包みの厄除け餅提げて帰りぬ国府の市より

おとなしく二頭の馬は巡りゐる農業祭に子らを乗せつつ

干し上げし切干し大根香りつつビニール袋に詰めこみてをく

刻みゆく玉葱の芯に青きもの春のきざしの緑の芽見ゆ

それぞれに稽古つみたるその踊り舞台の友を目に追ひ見つむ

いもごもの事

豊川 夏目勝弘

老いなどは我には無いと勇めども昨日の一つが消えてるにけり

歳のこと思ふことなし同年の死亡の話しを聞くこと多し

一日を庭師の仕事に励みきて二日を休む体となりをり

老いと云ふ言葉に反応することの少なくなりぬ平平凡凡

ビルに添ひゆるりゆるゆる落ちて来る白き羽毛をしばし見てゐる

物すべて落下するとニュートンが我の心は落ちることなし

本を読む左の頬の日差しの温し右の頬を隙間風すぐ

物差の目盛を使ふこと少なしときに手にするは線を引くとき

己が心を計る物差何ならむ善悪の単位は何ミリ単位

電池切れ時計止りて一日すぐ過ぎし時間を返へしてほしい

歌集 「夢のつづき」

水上 信子

ざざざざに刻まれわずかに残る空夜の都会の谷間に眺む

梅雨時を競いて咲ける花の群れ白山神社に紫陽花を見る

真夏日の狂気のごとき炎天に白百日紅すがしく咲けり

エンジンの音に誘われとろとろと機上にありて眠るでもなし

耳慣れぬ異国の言葉聞こえる何処に在りてもわが人世なり

多民族の国ならではの面白さ空港口ビーに飽くることなし

機上にて黒き瞳の若者と隣り合せになりてうれしき

家々の杏の花に包まれて自治民族の集落ありぬ

陸路にて国境を越ゆ検問の厳しく長く半日を経つ

難民のごとき心地で荷物押し長き悪路の国境を越ゆ

「啄木歌集」

石川啄木

頬につたふなみだのごはす一握の砂を示しし人を忘れず

いのちなき砂のかなしきよさらさらと握れば指のあひだより落つ

こころよく我にはたらく仕事あれそれを仕遂げて死なむと思ふ

浅草の夜のにぎはひにまぎれ入りまぎれ出で来しさびしき心

高山のいただきに登りながなし帽子をふりて下り来しかな

やはらかに積れる雪に熱^ほてる頬^ほを埋^{うづ}むるとき恋^こしてみたし

この日頃ひそかに胸にやどりたる悔^くありわれを笑はしめざり

箸止めてふつと思ひぬやうやくに世のならはしに慣れにけるかな

ある日のこと室の障子をはりかへぬその日はそれにて心なごみき

あたらしき心もとめて名も知らぬ街など今日もさまよひて来ぬ

『いよよせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

あら玉のはつはるの空はあかるきに吾が手にふれしはなみだ雨かも
三歳のあいかのピアノレッスンは三分三回そしておあそび

森 厚子

この雪は地にとどきつつ消ゆるかな十日町の友の雪は屋根までも
どんよりと曇りたる今朝もロウバイの黄花香ひつ家の中まで

山崎 俊子

躓きて転びて泣きて呻けども誰も起してくる人なく
につこりと会釈されしがわからない待合室にて逢ひたる人よ

三田 美奈子

一心に針仕事するわが母の友の欠け逝く年を追ふごと
涯も無き遠州灘をゆく船の行方も知らず影の茫茫

水野 絹子

極寒の中をわが畑の緑伸ぶ土中の春はたしかにそこに
虫食ひのネットになりし白菜の淡き緑葉今生き生きと

牧原 規恵

凍てつきし蒼空^{そら}を切り裂く如くゆく白き飛行雲をただ見つめをり
遠き日の記憶たどりて幼とす赤き手鞠のあんたがたどこさ

稲吉友江

雪積もるヘルシンキ空港に五時間もとどまりてをりウイーンへは遠し
いつつかの思ひの違ふこともありて君とわれはウイーンより帰る

鈴木美耶子

幼らと御節作りの大晦日市松模様のかまぼこ並びぬ
恒例のうから揃ひし元旦に幼仕切りぬビンゴ大会を

吉見幸子

煤黒き梁の曲がりにLEDわが三度目のお勝手直し

ヒューヒューもカタカタもせぬ窓際に来たれば雪雲静かに流るる

牧原正枝

新しき赤き帽子の地蔵さま宝珠を片手に目を細めたまふ

三十年絵の教室に通ひたる最後の教室別れはつきず

石田文子

現代学生百人一首

東洋大学

二十二時一人ぼっちの夕食を家族写真のほほえみが見る

東京学館新潟高等学校一年（新潟県）

大谷将和まさかず

ノーベル賞記者会見の家族愛誰も優しい眼をして話す

東京学館新潟高等学校一年（新潟県）

物井晴紀ものい はる き

冬を越え厚みを増したこの胸のユニホームの皺。ピンと伸びてる

東京学館新潟高等学校三年（新潟県）

村山勇大むらやま ゆう だい

春電車スマホさわらず景色見た明るい世界知らなかったな

福井学園福井南高等学校一年（福井県）

福住麻友ふくずみ ま ゆ

台風来て電車で止まると期待した小さき自分に被害で気づく

飯田女子高等学校一年（長野県） 佐々木優果^{ゆうか}

「がんばって」ノートの隅に書かれてた筆圧の濃い妹の声

上田西高等学校一年（長野県） 草野夏央^{なおい}

文化祭クラス企画で連だこを熊本に向け想いをつなぐ

上田西高等学校二年（長野県） 大久保龍成^{りゅうせい}

八月の唐松岳の山頂で夏は終わりととんぼが告げる

長野県松本県ヶ丘高等学校（長野県） 佐藤友香^{ゆうか}

御津磯夫短歌鑑賞 4

「月虹」 鮫島 満

日本の政治の作りいだしたる新らしき言葉汚染魚うそつき食品

『わが冬葵』昭和四十八年

淡々と詠んでいるかのようであるが、命の源となる食品について「汚染魚」と「うそつき食品」という新語が生まれたことの根源への怒りを抑えることができないことのわかる歌である。

この歌が詠まれたのは今から四十五年も前である。今から二十年ほど前、輸入肉が国産であると偽って売られる事件があり、その後、M社による挽肉偽装、I社やA社による賞味期限偽装、大手ホテルによるメニュー偽装、某社による古古米混入事件などが相次いだ。これらの偽装食品を「うそつき食品」と呼んだかどうか思い出せないが、この方がなまなましく胸に響き、それが上句に反響、静かな怒りが共感を誘う。

汚染魚という魚が登場したのはいつだったのか。たとえば、熊本県水俣市で起きた工場廃液によって有機水銀に汚染した魚が問題化したのは右の歌が詠まれる二十年以上も前のことだった。第五福竜丸を巻き込んだ魚の放射能汚染が話題になったのは右の歌のずっと後だった。とすると、作者のいう汚染魚は公害によって河川や海が汚された高度成長期のことであろう。

こういった食品偽装や汚染魚をことさら強い怒りをもって詠むのは作者が人の命に関わる仕事をしていたからでもあるだろう。その怒りの向けられる先は偽装を行う者にはなく、「日本の政治」に対してである。政治が人の命を守る仕事に真剣に向きあっていないことへの告発なのである。

食品だけでなくさまざまな分野、そして人の心や政治にまで偽装のはびこる時代を迎えてみると、作者の歌は鋭い予言にも思えてくるのである。

萬葉秀歌の鑑賞

津之地直一

吾はもや安見兒得たり皆人の得かてにすとふ安見兒得たり

吾者毛也 安見兒得有 皆人乃 得難爾為云 安見兒衣多利 (②九五、藤原鎌足)

(口訳) 自分は、ああ、安見兒を妻として迎えることが出来た。皆の人がなかなか手に入
れかねると言っているあの安見兒を我が妻にすることが出来た。

「内大臣藤原卿娶_ニ采女安見兒_一時作歌」とある一首。藤原卿は歴史の上でも有名な、大織冠藤原鎌足のことである。この歌には人間鎌足の偽らざる真率心が生々と躍動してこの上なくたのしい。「得かてに」の「かて」は「出来る」「能ふ」「堪ふ」の意の下二段活用の補助動詞「かつ」の未然形で、「に」は助詞ではなく、今は亡びた打消の助動詞の連用形である。従って直訳すると「得ることが出来ない―むつかしい」となる。そこから後世、形容詞「難_{かた}し」の接尾語用法の「―難_{かた}し」と混同され、「に」も助詞のように考えられて行き、終には「がての」「がてを」の語形まであらわれるようになる。この万葉の原文も「難爾」であるところを見ると、既にそうした意識が現われているようにも見られるのである。同じく鎌足の歌に「玉くしげみもろの山のさなかづらさねずは遂にありか_つましじ」(②九四)があるが、この結句も「あり得られないだろう」の意である。「吾はもや」と詠嘆句を冒頭に置き、「安見兒得たり」を第二句と第四句に繰返して、采女安見兒を妻として娶り得たその歓喜の情を声調の中に躍動させている。小躍りしている鎌足の姿が眼に見える様ではないか。

「人生百歳音頭」

高橋育郎 作詞

1 ソーレ 人生 百歳時代

シャン シャン それ来た めでたいな

長生き時代だ ドドドン ドン

元気はつらつ 太鼓の響き

老いも若きも 門出を祝おう

2 ソーレ 人生 百歳時代

心も体も リフレッシユ

生甲斐持つて 生きていく

あっぱれ 生涯現役だ

健康寿命を 伸ばそうよ

3 ソーレ 人生 百歳時代

みんなちがって みんないい

おたがいさまです ささえあい

いきいき生きてく 百歳だ

シャン シャン 笑顔の花が咲く

『俳句』

早咲きの花早々と散りにけり

柳田皓一

白梅と紅梅と見ゆひとり酒

青空へ伸びる徒長枝梅の花

三桮の末広がりやさかしまに

山迫京子

早春の草叢動き小鳥鳴く

パレットの絵具の色や春浅し

立春や豆の転がる朝の路地

森岡陽子

お見舞の葉書一枚春の雪

こはこはと風船握る小さき手

浅春の光散らして鯉動く

山元正規

啓蟄の砂箒目に掃かれあり

春浅し何も映さぬ水たまり

春寒し野点帰りの急ぎ足

田中清秀

枯山水岩間に紅し牡丹の芽

浅き春遊鳥羽根を震はせり

露座佛の顔まで埋まる春の雪

浜田紀政

暖色の絵具を求む春兆す

少年の膝にすり傷浅き春

人呼ぶなここの鶯の笹遊び

松本周二

下萌や黒々もぐら塚八つ

ひたひたと走者の息や蘆の角

梅盛りなれど侘しき空き家かな

重野善恵

暖簾出て襟搔き合はす余寒かな

枯草の踏まれし跡や草萌ゆる

春の川きらきら流れ海に入る

今泉由利

朽ちし葉をふうわり積みぬ春の土

回り道花三極に会ひにゆく

春近し体操教室初参加

植村公女

電線のドレミドレミや寒雀

春雪の気配くもり硝子かな

雪晴れや奥羽山脈ここに果つ

今泉如雲

引鶴や津軽にオホーツクの土器

節分に落花生まく津軽かな

かさね吟行会

「石神井公園」 二月

田中清秀

三宝寺池、井の頭池は湧水池である。石神井公園にあるこの二つの池は多摩川が作った扇状地の上に地下水が湧き出てできた。そして三宝寺池は石神井川の水源になつており、一九九六年に環境庁選定の「残したい日本の音風景」に選ばれている。今回のかさね吟行会は早春の息吹を求めてその石神井公園を訪ねた。

平成三十年二月九日、西武池袋線の石神井公園駅改札口に集合する。駅前の商店街を歩き日用品の店や居酒屋の喧騒を抜けると石神井公園の周りは景色が一変し、立派な邸宅が立ち並ぶ閑静な住宅地である。また、公園内は雑木林や多くの植物群が生い茂り、三宝寺池だけでも二万四千平方メートルありとても広々としている。

石神井の池にはじまる春の川

由利

木洩れ日の弱き樹間の芽吹きかな

素山

猫柳光り集めて膨らめり

京子

池の端に釣り人が何人か並んでいるが全く釣れている様子はない。来る春を待ちきれず明いひざしを求め終日糸を垂れているらしい。また、ここは禁猟区となつているので多くの小鴨や金黒羽白などの野禽が長閑に遊ぶ、ただ、広い水面にはうつつすらと氷が張っており池を渡る風はまだまだ冷たい。そして木陰には二、三日前に降つた雪の固まりがまだ残っている。猫柳のつぼみが春光を浴びて膨らみだしているが春はまだ先、暦の上で立春は過ぎているが正に「名のみ春」である。

春泥に残る重機の轍跡

正規

島国の島のごとくに残り雪

周二

松陰の芝生に残るまだら雪

清秀

石神井城は池と川の自然の地形を利用した中世の平城である。平安から室町時代この地を統治した豊島氏の居城であったが太田道灌によって滅ぼされその城址が三宝寺池の南側の台地にある。石垣はなく高さ三メートルもの土塁によって囲まれた大規模な城だったが、今はその面影は見られず説明の碑だけが立っている。その更に奥にある豊島氏ゆかりの三宝寺は参道に続く巨大な山門があり、格式の高い古刹であることが窺われる。山門左手

の大黒堂の地下に地藏堂がある。中に入るとそこには板碑（いたび）や亡き子を弔う千体地藏が数多く安置されており訪れる人を驚かせる。人びとの神仏に対する畏怖と親和の情を感じると共に、この地の歴史と文化の一端にふれることができる。

千体の手彫り地藏や春きざす

陽子

浅春や古へ語る土地の人

れい子

三宝寺池の一部には国指定の天然記念物である沼沢植物群落がある。中ノ島を中心にカキツバタやジュンサイなどの水草類が自生していたが都市化の影響で植生に変化が出ているという。古代から人が住み川の水源となっていた湧き水だが今は地下水を汲み上げて水量を維持しているらしい。人間は自然と調和し平和に共存することによってのみ永く生き残り繁栄する、と言う自然保護の精神を今一度考える必要があるだろう。掲げてあった都の保護目的にも「かつての三宝寺池が有していたであろう水辺の景観、清冽な水、動植物をよみがえらせ・・・自然回復の機運を高める」とある。

薄氷に鶴鶴軽く歩きけり

皓一

牙返るメタセコイアに飛行機雲
池の端のレストラン混む木の芽晴
しのぶ
さち子

公園とその周辺は漫画の耕作シリーズや映画「Wの悲劇」などに舞台としたものがあると聞く。そんなレトロな雰囲気を持ったレストラン「ラ・ガツア」で昼食となった。お洒落な店内で作句の工夫はさて置き、しばし歓談しながら体を温め休憩を取る。

句会は駅前にもどり今回もカラオケハウスを利用した。広い部屋で十分なスペースがありゆったりとしており使いやすい。いつもの様に囁目三句四句選でおこなわれ俳句の修練と懇親を深めて早春の吟行はお開きとなった。

■かさね吟行会■

日時 四月十三日（金）

場所 向島

集合 浅草吾妻橋交番

十一時集合

申込 森岡陽子宛 (03) 3712・2835

『酔いの徒然』（七二） 丸山酔宵子

『プロセッコはプロセッコ』

ドン・ペリニヨン、モエ・シャンドンに代表されるシャンパンは、「はれ」の日に相応しく心がうきうきしてくる。シャンパンはその選定基準の厳しさと熟成期間の長さにおいて突出していて、瓶内二次発酵を行った上で封緘後15か月以上の熟成を経たシャンパン製法のスパークリングワインを指す。シャンパンとは英語読みで、シャンパーニュ委員会（CIVC）ではシャンパーニュと称している。同様の瓶内二次熟成工程を経たスパークリングワインに、フランス「クレマン」、スペイン「カヴァ」、イタリア「スプマンテ」、ドイツ「ゼクト」などがあるが、大御所シャンパーニュの伝統と品質は世界に揺るがない地位と品位を確保している。

同じスパークリングワインの一翼を担うのがプロセッコである。瓶内二次発酵とは異なり、二次発酵を密閉し

た圧力タンクの中で行い、澱引きも一度にできるため、一気に大量のスパークリングワインを造り出す事ができるシャルマ方式（発明者・メトード・シャルマ Methode Charmat）である。誤解を恐れずに言うと、プロセッコはシャンパーニュのように偉大なスパークリングワインではないかもしれないが、気楽な普段の食事に合わせる気取らないスパークリングワイン。毎日の何気ない食事にプロセッコがあると、品のいい泡が、食卓に華やかさと爽やかな味わいを届けてくれる。

プロセッコの故郷は、ユネスコ世界遺産に正式申請した北北西にアルプス、東南にはヴェニスを臨む北イタリア ヴェネト地方。アルプスに続く小高い山々が広がり、険しい山頂に至るまで、青々としたプロセッコ用葡萄「グレラ」畑が段々状に広がっている。

味わいの甘辛の度合いの表示は、糖度の量によるが、ブルット (Brut 0-12 g/L)・エキストラ・ドライ (Extra Dry-12-17 g/L)・ドライ (Dry-17-32g/L)。日本のビールの言うどライが辛口と錯覚するが、ブルット (Brut) が辛口なのだ。

ガスは限りなくキメ細かくそして酸味が少なく口当たりも柔らかなので、アペリティブは勿論、サラダ、魚料理そしてそのまま肉料理のメインディッシュまで楽しめる。グラスはシャンパン用のフルート型よりも、広めのチューリップ型の方が、より美味しく飲めプロセッコのオフィシャルグラスも同じ形になっている。

昨今、スパークリングワインがブームになっているが、残念ながらプロセッコは未だ認知されていない。しかしドイツや北欧、アメリカでは既に評価され、ニューヨークロックフェラーセンター前の憧れのお洒落なワインバー・モレル (MORRELL)、「バイ・ザ・グラス・リスト世界No.1 (World's Best By-the-Glass Wine List by The World of Fine Wine.)」でも「メニエールのトップ」に載せられている。

雪残るマンハッタンのプロセッコ

酔宵子

評価に対してどう思うか、を大人の審査委員は考えないのだろうか。それはその子供にとつて、少なくとも将来に掛けて嫌な印象しか残らないであろう。流行の齎す功罪の一つがそこにある。因みに、『ゆるキャラ』の三条件というのがあるので紹介しよう。

1 郷土愛に満ち溢れるメッセージ性があるもの。

2 立ち居振る舞いが不安定で、且つユニークであること。

3 愛すべき『ゆるさ』を持ち合わせていること。

だそうである。審査も『ゆるい』のかな？

科学の世界にも『流行』に近いことがある。それは、最先端をきる研究は常に新しい事柄を追求しているのので、『流行』のトップを行くものである。即ち、一つの素晴らしい研究によつて発見された事実は、他の研究に大きな影響を与えるもので、一つの新しい道を開くと同様に、多くの研究はその道を進むものである。それに新しい技術が加われば、尚更、その技術を導入して更に今までに無い新しい研究に突き進むことが多いからである。どんな最先端技術と云えども、底辺では完璧な模倣から成り立っている。ここで言う模倣とは、他の技術の追試確認である。更に云うならば、場合によっては、学界そのものが方向転換をせざるを得ないほどの発見ということもある。現実には、従来の生化学の分野では、遺伝因子（染色体の中にあるDNA）からの情報の流れは、DNAに組み込まれた遺伝情報が、m-RNA（メッセンジャーRNA）に写し取られ、更にその情報はt-RNA（トランスファ

RNA）が運んでくるアミノ酸の種類を選択的に読み取られながら蛋白質の合成にまで繋がっている。この流れは一方方向性で、逆行はしない、というのが一つのドグマとして解釈されていた。それが、一人の学者(H.M.Temm)教授・米国ウィスコンシン大学)が、RNAが持つ遺伝情報は、DNAとして写し取られることが判り、明らかに情報の伝達は双方向性であることを明らかにした。この発見は、一つの酵素を見出したことではつきりと証明され、従来の学説は完全にひっくり返されたのである。このことで Temm 教授はノーベル賞を授与されている。その酵素の発見が切っ掛けとなり、現在の最先端の遺伝子科学が存在し、例のE.ES細胞の出現もこの酵素がなければ発見されなかったのである。このような学問の連鎖というものは、新しい発見が新しい事象の発見に結び付くので、思いがけない影響力というものが有る。それがさらに学問の方向性まで換えてしまうと云う事からも、一種の流行性を持つのである。このように考えると、『流行』とは実に難しい問題であるが、『流行性感冒』のような迷惑な流行があつたり、『流行語』のような他愛の無いものもあるが、概して言うなれば、というか小生としては、『流行』は素直に受け止めるが、スマートで洒落たものとして受け止めない。

そして、『何かする』にしても、『流行』には左右されずに、オリジナリテイの高い作品を好きなように自由に創り出せば、こんな幸せなことはない。

「江上浩二の独り言」 4 江上浩二

蕎麦猪口

よく暗黙知を形式知化して、伝統技能などを継承、残していかなければならないと叫ばれている。地盤沈下しつつある現代のもの作り日本を憂えてである。

今、暗黙知がなんぞや、形式知がなんぞやという議論はとりあえず避けておいて、暗黙知は、もの作りが上手い年配の職人さんが設計図や紙に書き留めた仕様書など無くとも皆さんが吃驚（びつくり）するような作品、細工物をこしらえてしまう、素晴らしい「力」と思っ頂きたい。

これに対して、形式知はハウツーものだとか、製品の製造仕様書とか、多くの人が納得している、いわゆる紙に書かれた知識・知恵などである。難しい特許の明細書も含まれると考えて頂きたい。

先日（平成21年年末）、大手有名TV局の番組で、江戸時代の蕎麦猪口の話をしていた。素晴らしいデザイン、絵付け、その絵付け模様など時代時代の世相を反映していて、単なる食器としての器に留まらず、匠の技が上りつめた焼き物の作品として、紹介されていた。

こんな話をする、その焼物師の技を、いかにも形式知化する例として、ぴったりだという話になってしまいそうだが、私の視線、興味は、蕎麦はこの猪口に注がれた汁に蕎麦を浸けて、ずるずると音を立てて一気に喉越しを通り越すよ

うに、呑み込んで食べるのが最高だよという、西洋流では音を立てて食するなどマナー違反だと言われても、独自の日本の楽しみ方があるという点に行ってしまった。番組は、いかに焼き物としての猪口の芸術性を説きたかったのかもしれない。

蕎麦の食べ方と似て、またある番組では、最近の若い人がラーメンの麺をずるずると一気に飲み込めない話をしていた。いちいち細かく麺を切つて、蓮華（れんげ）にのせて少しづつ食べる様になって来ている、食のスタイルが変わってしまったという。

何故、和蕎麦やラーメンを一気にずるずると素早く食するかというと、麺に絡んだ汁が落ちないように、麺と汁の両方を楽しむことにあるらしい。これが出来ない若者は、蓮華に麺とスープをのせて浸したまま味わう様だ。

正月の前に、やはり年末、今や現役を退いた、有名なサッカー選手が話していた。日本人は可笑しい「民族」だねという表現で、俺はあの柔らかいお餅が食べられないのだと話していた。やはり、お餅は食べたかったらしいが、柔らかいお餅を食べやすく、小さく千切つても、独特な触感が邪魔をして柔らかい餅が喉を通らないそう。

恐らく育った食文化が違うので、大人になって日本へ来て、プレーをして、国籍まで取って、上手い日本語をしゃべりまくっても、柔らかい餅を飲み込む「日本人」には到達出来ない話として受け取った。

さて、暗黙知を蒸し返すと、先ほど「もの作りが上手い年配の職人さんが設計図や紙に書き留めた仕様書など無くとも皆さんが吃驚するような作品、細工物をこしらえてし

まう、素晴らしい「カ」と仮の話をしたが、美味しい汁が猪口に注がれ、これに箸でつまんだ蕎麦の端をちよつと湿らせ、少し開いた口で一気にずるずると吸って味わう蕎麦の食べ方が出来ない若い人にとって、蕎麦の食べ方は暗黙知であって、こう紙に書き留め、形式知化して説明することで、果たして簡単に蕎麦が吸れるのだろうか。

お餅を飲み込めないブラジル生まれのサッカー選手に、柔かいお餅の食べ方は、この「和食の食べ方ノウハウ」本をお読み頂ければ、食べれるようになるのだろうか。

こんな若い人向け、外国生まれの方向けの「和食の食べ方ノウハウ」本は未だないと思う。「G」を超えた私など思いついても、小さい時いちいち蕎麦の食べ方、ラーメンの食べ方など大人に説明を受けたこともなく、実際受ける必要もなく、親の食べ方を見て、同じように蕎麦を吸る、餅も飲み込んできた。だからと言って、これが暗黙知だとも認識はしていなかった。私が小さい頃に暗黙知という無愛想な語彙は無かったと思う。

サバンナや森にいる動物の物の食べ方を見ると、いつ敵に襲われるか、いつ食い物にありつけるか、食うことは相応なストレスをはねのけた状況下であることは間違いなく、優雅に何十回も噛んで食べてはなく、噛み千切ったものを一気に飲み込んでいるような状況である。

これは無意識の行為、行動に類されるもので、脳学者が講釈をたれる大脳のどこそこの部位では××覚野が活性になっただけで、作用しているのが解りますとか言われても、なんの意味もなく、動物と同じく、人が長年進化してきた過程でも残されている無意識の動物的行動力と想っている。

これを、さらに無意識をつかさどる脳幹の働きだと説明されても、蕎麦を吸れる人、ラーメンを吸れない人、両タイプの人にとってもなんの意味も持たない。蕎麦を吸っている時に脳幹などでいちいち考えているはずもない。

実は、蕎麦猪口の話が続いていて、蕎麦汁を蕎麦に漬ける際には、猪口の内側が良く見える。先人たちは、猪口の外側の絵付けもさることながら、内側の絵付けに全力を注いだそう、図柄の分類や図柄の楽しみ方が番組で紹介されていた。

この食器としての器の内側や内側の底に絵付け、特別な図柄を加工することは良く行われている。私が好きな江戸切子でも、ガラス製のお酒用猪口でも、意図して職人さんが内側から覗ける際のデザインを外側に施し、いつも買求めるお店の方から、これは××柄、それは××柄と教えて頂いたことがあった。確かに、切子の猪口の底にも綺麗なシンメトリーの図柄を見ることが出来る。

焼き物は外から眺めていると内側に潜んでいる作家の意図は分らないが、ガラスは透けており、カットは外側に施してあるのだが、プリズムの様な効果も加わり、実際内側から覗かないと作家の意図が分らないようだ。

それにしても、蕎麦を一気に吸って音を立てて食べる事が暗黙知で、それを形式知化することなど全然必要でないことだと思ふ。いっそのこと、蕎麦を一気に吸って出来るだけ大きな音を立てて食べるコンテストでもしたら、若者がたちまち寄って来るかもしれない。

平成22年5月18日マイブ로그より

絹の話 (89)

「アトリエトレビ」今 泉 雅 勝

「絹と花嫁の角隠し」

最近少なくなつて来ましたが、結婚式の時、花嫁がかわる白い角隠しにはどんな歴史があるのでしょうか。

綿帽子の始まり

古代日本では政権の武力の基盤である鉄は朝鮮半島からもたらされてきました。それを背景に大和朝廷は大化の改新を成功させるのです。

政権基盤が一段落した西暦633年、朝鮮半島で高麗、百済連合軍に新羅が攻められ、苦戦する新羅に唐が加勢し、形勢不利になった百済救済に大和朝廷は鉄等の交易を守る為に、4万の援軍を朝鮮半島の白村江に送ったのが「白村江の戦い」です。

大和には4万もの兵士に着せる軍装がにわかにはありません。そこで各地で繭生産が振興しはじめて、税の「調」として納められた、軽く、温かで防矢効果の優れた繭(真綿)を兵装(胴衣、兜)に使用したのです。

特に兜は何層にも重ねた繭を濡らして固くて装着した

ようです。(鎌倉時代の蒙古襲来の時、蒙古兵の軍装は真綿と羊毛のフェルト)

この時、綿帽子をかぶられて陣頭指揮をとったのが神功皇后でした。

また神功皇后は応神天皇を懐妊した時、真綿の腹帯を巻きました。この様なこまごまとした身の回りの世話をしたのが侍女「伊波多姫」で、今日でも妊娠5ヶ月目にする腹帯を「岩田帯」というのはその言い伝えといわれています。

いよいよ出産となり腹帯が不要になると、伊波多姫はその腹帯を頭に頂き、出産を万事取り計らったと言われ、その後、祝い事の時は女性の髪のを防ぐ実用を兼ねて、真新しい真綿や白絹を頭に巻いて勤める風習が出来たと伝えられています。

その後、伊波多姫の子孫は京都の桂に住んだので、「桂女」と呼ばれ、出産や祈祷、祝い事などを専らの仕事にして来ました。そのような時は必ず真新しい真綿を頭に巻いて行ったようで、これを人々は「桂包(かつらづつみ)」と呼ぶようになったのです。

宮中の観菊

平安時代には9月9日(旧暦)の重陽の節句は菊の節

句とも言われ、宮中では観菊の宴が催され、杯に菊の花を浮かべて酒を酌み交わし、長寿を祝い、詩を詠み合ったそうです。

昔はこの季節、京都では霜の降りる事もあったようで、菊の花に真綿をかぶせて霜除けをしたのだそうです。「絹の綿帽子」と呼ばれていました。

菊の香りを含んだ真綿はなんとも言えぬ高貴な香りとして、その真綿で体をなでると、その年は無病息災に暮せると伝えられていました。時として、菊の綿帽子を頭にのせたとも考えられます。

花嫁の綿帽子

江戸時代になると武家を中心に、大きな祝い事である花嫁の輿入れの時に桂女のかぶっていた綿帽子を花嫁がかぶるようになって来ました。

しかし庶民にはそうはいきませんので、手ぬぐいをかぶる事も有ったようです。

花嫁の角隠し

時代が進むに連れて、綿帽子は、祝い事ばかりでなく、実用にも色々工夫され、使われました。

寒風を凌ぐ「額綿」。「被綿」など烏帽子の様な帽子風

な形が出来て来ます。

また、真綿ではなく、練って柔らかくした絹織物も使われるようになってきました。

今日の花嫁の角隠しは意外に新しい事で、明治時代になってからの風習のようですが、昨今の結婚式に角隠し姿を見かける事は少なくなりました。

風俗習慣と云うものは時代と共に知らぬ間に変化して行くものです。

真綿は軍事にも使われましたが、庶民の生活の中に深くとけ込み、風邪を引くと喉に真綿を巻いたり、布団や襦袢の皮に使ったり、生活の中にとけ込んでいましたが、この様な事ももうすぐ忘れ去られようとしています。

戦後人工的に絹を作る研究が進み幾つもの化学繊維が出来て来ましたが、いずれも絹には遠く及びません。絹ほど親和性に優れた繊維はまだ他に見つかっても、出来ていません。

私達の生活に絹がどんな形で再登場して来るのか期待されるところです。

楽しい時間 65

山本紀久雄

2018年2月28日

明治維新150年・・・その三

今年は維新150年、各地で記念行事が開催されているが、関心のない方も多い。

だが、次の狂歌をご存知の方は多い。嘉永6年（1853）6月3日、浦賀にペリー来航の隻艦隊に対する当時の人々の反応を詠っている。

「太平の眠りをさます正喜撰（蒸気船） たった四杯で夜も寝られず」。

この落書のように「江戸市中はあげて大混乱に陥った」といわれ「軍馬のひづめの響き、武装したサムライのわめき声、ひしめき合う荷馬車の騒音、隊をなして走る火消し組、乱打される半鐘の音、女たちの金切り声に混じって、泣き叫ぶ子どもたち」などと語られることがあるが、はたして本当にそうだったのか。

6月9日、幕府が久里浜でアメリカ大統領の国書を受領した後に、ペリーは江戸湾内海へ測量目的で二度目の侵入をし、その時の記録が『ペルリ提督日本遠征記』に残されている。

《翌早朝、測量船が下ろされ、湾の奥を測量する。入江があり、漕ぎ上る。そこへ外国人を見たいと住民が集まってきた。「人民の或る者はあらゆる身振り手真似で歓迎の意を表してボートに挨拶をし、ボートへ喜んで、水と、すばらしい梨を幾個か提供してくれた」。たがいに友情がわいて、「煙

草を交換し合って喫んだ」。土官が短銃を見せ、「それを発射して、初めてそれを見た群衆を面白がらせ、日本人をいたく驚かせ喜ばせた」。帰還した水兵たちは、「日本人の親切な気質と国土の美しさに、有頂天になっていた。実際、眼の向くどこでも、風光絵の如く、それ以上美しい風景は他になかった。艦上に居る者さえ、周囲の海岸を眺めて飽くことを知らなかつた》（『開国と幕末変革』井上勝生著）

この記述からは、幕末期の一般民衆が、アメリカ人を怖がるどころか、親切であり、社交的であり、快活な振る舞いをみせていたことがわかる。

ところで、住民が差し出した「すばらしい梨」に疑問が残る。嘉永6年6月は西暦で7月になる。梨は通常秋に収穫されるのであるから、果たして遠征記に記されたように、梨が7月に収穫されていたのかどうか。

この件について、『開国と幕末変革』の著者井上勝生氏が、2006年12月に開催された「山岡鉄舟全国フォーラム」の講演の中で次のように語ってくれた。

《神奈川県農業技術センターに問い合わせた結果、ペリー側の水兵がもらった梨は、江戸後期に栽培されていた「わせろく」で、6月下旬から収穫できた青い梨です》

住民が提供したすばらしい梨が、当時、間違ひなく収穫されていたのであるから『ペルリ提督日本遠征記』の記述内容は妥当で事実であろう。

翌年の安政元年（1854）3月3日、日米和親条約が締結された。条約がまとまったので、ポーハタン号において、日本の委員たちを招いてレセプションが開いた。その様子を随行画家のヴィルヘルム・ハイネが描いた絵が有名である。（『ペルリ提督日本遠征記』）

絵には、巨砲を囲んでアメリカ人と武士が入り交じって座についており、アメリカ側が全員立ち上がって乾杯をしている様子が描かれている。

アメリカ人と立ち話で交歓する武士が見える。手前の武士は酒瓶を後ろに置き、椅子に落ちついて、まさにパイプをくゆらせている。以下、『遠征記』の記述である。

《武士たちは「素晴らしい大食振りを発揮し」、乾杯する際には「先に立ち上がって健康を祝し乾杯して、それ等の酒を飲むことを決して控えて目になかった」。「声高で叫び続け、その叫声は活発で」、軍楽隊の音よりも大きかった。「大いに楽しんでいた」。食べ残りを包んで袂たもとに入れてアメリカ人を驚かせる。(中略) 退艦にあたって目付の松崎は「腕を提督の頸にまきつけて」、「涙ぐましい感情で」、「日本とアメリカは同じ心である」と繰り返した。そして「陽気な一行全部が艦隊を去り」、サラトガ号が礼砲を打ち、「艦隊は再び、何時ものような静けさのうちに残されて、平常の艦務につくことになった」と結ばれている》

この情景描写は、武士たちが「大いに飲み、楽しむという日本人マナーを西洋人の前でも発揮している」わけで、幕末期の武士が持つとされた「嫌悪と警戒心、虚勢と恐怖によるコンプレックス」が全くなく、外国人に対する一般的「武士のイメージ」を変える姿であって、冒頭に示した「有名な狂歌」状況とは全く異なる。

また円朝もこの狂歌に触れていない。嘉永6年時、円朝15歳、兄が住寺する谷中長安寺に母とともに住み、落語の修業に明け暮れ、兄玄昌から本堂で稽古する時は、座禅を組んでから行うべしと諭され、それを日夜実行し17歳まで過ごしている。

さらに、品川の寄席にも通って、谷中に帰ってくるのが午前2時を過ぎることもしばしばという生活であったから、品川界限でペリー来航が大きき話題となっていれば耳に入っているはずで、民衆が「大混乱に陥った」という実態ならば、必ず、そのことに触れたであろう。

円朝50歳の時口述した自伝『三遊亭円朝子の傳』にも、ペリー来航について何らの記述がない。

これらから推し量ると、当時の人々は、初めて見る外国船や外国人であるから、驚いたであろうが「慌てふためく」状態でなく、かえってペリー来航を何らかの情報で知っており、来航を予期・予測していたのではないだろうかと思われる。

そのことを指摘するのが『予告されていたペリー来航と幕末情報戦争』(岩下哲典著)である。

《吉田松陰は長州浪人。その松陰が、ペリー艦隊が停泊中の浦賀から江戸の長州藩邸に住む同藩士の道家竜助に宛てた手紙がある。「僕四日の夜、船を發候処、甚遅し。且風潮共に不順」》

松陰は浦賀に直行しようとしたが、天候不順で船で行くことをあきらめ、品川から陸路で浦賀に5日に着き、この日は夜遅かったので、6日の朝に《高処に登り賊船の様子相窺》ってペリー艦隊を見た。

松陰は割注で本文に注記するかたちで《船は北アメリカ国に相違無之、願ひ筋は昨年より風聞の通りなるべし》と書き、《アメリカ合衆国の船と認識し、驚くべきことに、アメリカの「願ひ筋」は昨年よりうわさになっていた通り》と述べている。次号に続く。

漢詩研修 (十七)

千代田岳精会 平井茂行

武野の晴月

林羅山

武陵の秋色月嬋娟

曠野平原晴快然

青青輾破無轍迹

一輪千里草天連

武陵秋色月嬋娟

曠野平原晴快然

輾破青青無轍迹

一輪千里草連天

【作者】

林 羅山（一五八三—一六五七）江戸時代の初期の儒者。名は忠また信勝、字は子信、幼名は菊松丸、通称は又三郎。羅山はその号。のち剃髪して道春と称した。京都の四条新町の生まれ。遠祖は藤原氏という。学を好みことに宋学をよく学んだ。慶長八年、朱子集註の「論語」を講じた。これを知った大外記の藤原秀賢が徳川家康に訴えて「古來経書を講ずるは明経博士家ならでは、かなわず、匹夫にして勅許なく、朱学を唱うるは罪に当る」と言ったが、家康がきかず、かえって家康にその学を認められ、のち世襲の大学頭林家の始祖となるに至った。慶長九年、藤原惺窩に師事、翌十年、二条城で家康に会い、十三年、家康の侍読となり、幕府の出す諸法度の文案はおおかた羅山の手になった寛永七年（一六三〇）上野忍岡の地を賜って別荘としてここに書院を起こした。これが、後の昌平黌の起りである。家康のあと秀忠、家光、家綱に仕えた。

【解説】

この詩は「林羅山詩集」に収められている。慶安四年（一六五二）九月二十六日、羅山六十九歳のときの作で、武州湯島（文京区湯島）の眺望のよいところから。晴れた夜の月に照らされる広漠とした武蔵野の叙景。

《語釈》

*武野：武蔵野の原をいう。*武陵：湖南省にあった群名。理想郷桃花源があったので名高い。晋の陶淵明の「桃花源記」に武陵の漁師が溪に沿うてさかのぼり、桃花の林に入り、さらに山の洞口を潜り、一の仙境に至ったことが記してある。武陵は中国で時代により武州ともいい、武蔵の国に通ずるので（武州の）江戸の意に用いられたのであろう。原双溪は武のつく地名は中国に多く、ひとり武陵をもつて武州の意とするは非であるというが、武陵が時に武州と称せられたことに気づかなかつたのではあるまいか。*嬋娟：月花、人などの姿や色に繊細な美しさのあるのいう。たおやか。あでやか。うるわしい。*曠野：ひろびろとした野原。*快然：さっぱりして気持の良さ。

「歴代天皇御製歌」(八十七)

貫名海屋資料館

「明治天皇」⑥

明治四十三年―一九一〇年―五十九歳

○神祇 わがくには神のすゑなり神まつる昔のてぶりわするなよゆめ

○寄神祝 天てらす神の御光ありてこそわが日の本はくもらざりけり

○ さだめたる國のおきてはいにしへの聖ひとしのきみのみ聲なりけり

明治四十四年―一九一一年―六十歳

○ 蟲聲

さまざまの蟲のこゑにもしられけり生きとしいけるもののおもひは

○ 夢

たらちねの親のみまへにありとみし夢のをしくも覺めにけるかな

○

きくにまづ身にぞしみける誠よりいふ言の葉は長からねども

○

思ふこといふべき時にいひてこそ人のこころもつらぬきにけれ

明治四十五年―一九一二年―六十一歳

○春暁月　あけがたの霞のうちにつとなく消えゆく月のかげのしづけさ

○花　　たかどのの窓てふ窓をあけさせて四方よもの櫻のさかりをぞみる

○花　　うつろへばうつろふまゝになつかしと思ふは花のいろ香なりけり

○雲　　ひとむらと思ひし雲のいつのまにあまつみそらをおほひはてけむ

○ おもふこと思ふがままにいひてみむ歌のしらべになりもならずも

○ 若きよにおもひさだめしまごころは年をふれどもまよはざりけり

土偶(5)

夏目勝弘

食べれば出る。これは生物においては避けることのできない、生理現象である。

縄文人も現代の人間と変わることはない、同じDNAを持つ人種である。

貝塚からは化石化した(糞石)が発見されている。形等は自分のものと変わることはない。

どうして化石化した糞石が出てくるかというと、貝塚に排泄された場合、貝のカルシウム分の作用によるために化石化すること。

この排泄物を調べることによって、食生活や健康状態がより鮮明に分解される。しかし排泄物が人なのかイヌなのかの判断がつかないことが多いとか。

でも食べるものは人間と犬とは同じ物を食べている事が多いとも思う。

野生動物の中には、ウンチがないと生きていけないものもたくさんいる。

ウンチのなかで生まれるハエ・ウンチを食べるウサギ・母親からウンチをもらうコアラ。

野生動物のウンチには、ムダがない。草食動物のウンチにも、肉食動物のウンチにも、ちゃんと意味がある。

縄文人が家族として、狩りの相棒としての犬は、視力が悪いが、においから多くの情報を得ている。ウンチのにおいが我が子の印。

犬のウンチデーター、量、やや多目、臭さ、少し臭い、硬さ、少し硬い、特徴、調子がいいとバナナ型。

縄文人の獲物の一つ、タヌキの場合は、ためフンをする。近所同士で共同トイレをつくり、みんな様にそこでウンチをする。

大きいものになると直径50cm、高さ15cmにおよぶ、行動範囲内に10箇所ほどの、ためふんを持つていと言われている。

自分の居場所を知らせる伝言板のようなもの、そのためフンのなかに、知らないメスのにおいがしたら、オスタヌキは、いてもたってもいられないだろうと。

縄文人の狩りのなかに、アナウサギもある。

ウサギは、ウンチを食べないと死んでしまう。ウサギのウンチはコロコロウンチ、他に水分の多いねっとりウンチをする。

ねっとりウンチは、草などを食べた後の二度目のウンチで、消化できなかった栄養と一緒にできたバクテリアがたっぷり含まれている。そこでウサギはこのウンチを食べ、ビタミンなどの栄養をとっている。

コロコロウンチは、栄養のない二度目のウンチ、基本的には食べない。

命がけで狩猟をしたであろうツキノワグマは、冬眠をする。ツキノワグマは、春に目覚めるまでは、おしっこやウンチはしない。

冬眠前に、かたまる石のようになる松ヤニを食べ、このカチカチウンチは肛門で引っかかり、栓のようになる。巣を汚さずに春を迎えることができる。

縄文の人々もこれらの動物の習性を知り狩りに利用していたのではないのだろうか。

「氷魚」のことから (207) 岡本八千代

やつと、ムクゲ庵にこもって鉛筆をもつことができた。

「すずしろの花季すぎつつ暮れてゆくわれの一日も事なき
ごとくに」
八千代

「すずしろ」は、春の七草の大根の花のことである。大根の花は白い。私にとってはそれがとても美しい。しかも淋しさがある。と思ったので、いつか、色紙に絵を描き、歌を書いたのであった。

寂しい時には寂しいものなのだ。―その心の動きがあることが歌にもなるう。

司馬遼太郎の「菜の花忌」も過ぎた。その妻の福田みどりさんも亡くなられて、実弟の上村洋行氏（司馬遼太郎記念館長）は、「姉は司馬遼太郎といた時期、最も輝いていた」と言われた。女というもの、夫婦というものはそうなのか？と感動した今の私である。これからの残された自分の人生は自分で決断してゆくのかもしれない。

きのう、注文の本「おらおらでひとりいぐも」が届いた。芥川賞作（158回）岩手遠野市生まれの若竹千佐子著の本である。

著者は、岩手市から身ひとつで東京に出て、それより50年、住み込みのアルバイト、夫、周造との出会いと結婚、二児の誕生と成長、そして夫の死、「この先一人でもうやって暮

す。こまったあどうすんべえ」とカバーの裏にも書いてある。また、「捨てた故郷、疎遠な息子と娘、そして亡き夫への愛、震えるような悲しみの果てに、桃子さんが辿り着いた、圧倒的自由と賑やかな孤独とは――と」。

私は、宮沢賢治の「あめゆじゅとてちてけんじゃ」を思い出しつつ読んだので、作者の東北弁のユニークな流れの中にある哀しみの感情を受けとめた。

作者のいう「圧倒的な自由とは？賑やかな孤独とは？」私、個人にとってどういうことなのか？命題である。

「画家の詩、詩人の絵」という本の中に、正岡子規の歌を拾った。

病む我をなぐさめがほに開きたる牡丹の花を見れば悲し
も

枕べに友なき時は鉢植の梅に向ひてひとり伏しをり

また、萩原朔太郎「月に吠える」序文より

「すべてのよい抒情詩には理屈や言葉で説明することの出来ない一種の美感が伴う。これを詩のにおいという」とぞ。

「絵のにおい、詩のにおい――二つが、一つのものの中で出会う」とか？ 果たして「詩のにおい」なるものに向かつて、後短い私の人生に向かつて、「おらおらでひとりいぐもかな」と思いつつ今回はここで鉛筆を置く。

磯辺 耐

みなさまへ②



片松葉に
なりました!!

で、調子にのって、おとなりさんのベットの下に
落ちてしまったティッシュBOXをひろおうと
していたら、白い看護婦さんに
やはり見つかってしまいました。

怒られました☆



白い看護婦さん、いつも本当にありがとうございます。

みなさまへ⑫



※ 松葉杖を
がついて
リハビリ室に
挑む、たえ(40)

みなさま、ご心配をおかけして、本当に申しわけございません。9/8で12日目となります。

診断の結果、前十字靭帯断裂とのこと。全治1ヶ月、また、再建手術をするならば、

もう少し時間がかかります。その間、メンバーのみなさま、コーチのみなさまに再度ご迷惑をおかけいたしますことと...ご了承下さい...


この12日間で左足が3cm細く!!
「使わないものは衰える」です... 

編集室だより【二〇一八年二月】

○王子稻荷神社の初午。

江戸時代から続く「嵐市」も今日の「午の日」に催された。火難をまぬがれ、無病息災のご利益があると、「火防の嵐」、奴嵐が売られる。

この日、家のドアを開けると、祭のざわめきは私の家にもで伝ってくる。

参拝の長い行列に加わってみる。

○石神井公園へ吟行。

石神井公園・三宝寺池、井の頭池、善福寺池、武蔵野三天湧水池。

東京にでてきた私の学生生活は、久我山の家から毎日、井之頭公園を通って成りたった。善福寺公園の近くに友人の家があり、ことあるごとに善福寺池の湧水の様子を確かめた。三宝寺池のあちこちに思い出がいっぱい。こんな風に、外国へ行ってしまう前の生活が蘇ってくる。

今は、三宝寺池から流れる石神井川の川近くに住み、私の前を流れゆく水を、隅田川へと見送る。

○小石川植物園へ、来月の吟行のため下調べにゆく。

入り口に、パンパステグラスが大きな白い穂をたてているのだが、今は冬枯れ中。少々淋しい。明治時代に日本に入ってきたアルゼンチンのカンポのパンパス（草原）グラスに逢えるのがうれしくて、よくスケッチに来る。少し前には、ほとんど人影がないうえに、カラスがいっぱいいて避けて

くれることはなく、恐ろしかったものだけけど、いつの間にかほとんど姿を消してしまった。

○東京国立博物館・平成館。

葛井寺の秘仏、国宝、千の手、千の眼、十一の顔、現存最古。もう二度とおめにかかれることのない千手観音のお近くに、心ゆくまでお邪魔させていただいた。

○新宿・末廣亭へお招きいただいた。

座布団返しの子「男の子」をふくめ、二十数人の出演。落語・邦学バラエティ・物まね・漫才・奇術・曲ごま・浮世節・太神楽：知るも知らぬも、技を極めた「芸」に浸った・笑った・感心した・感じた。

身も心も改まった帰りがけ「フグ刺で一献」良い日だった。

○上野・国立科学博物館。

「南方熊楠、生誕百五十年記念企画画展」

アルゼンチンの広大な「パタゴニア地方」へ出掛けていたことがあった。アザミの花が咲いていたり、ダーウィンレアが近くを走っていたり…。

生物学者のチャールズ・ダーウィンさんが、ここに来られた。南方熊楠さんもいらつしゃった。…そんなことを思いながら、原住の人の造ったのであるう石矢鏃など探した日があった。あれこれ思い出しながら、熊楠さんの残された膨大な研究に目がまわる。しっかりと教えただだこうと思ふ。

昭和天皇御製

「雨けぶる神鳥を見て紀伊の国の生みし南方熊楠を思ふ」

野菜・まんだら

(2) 落花生・ピーナッツ



- 原産、ボリビア、アンデス地域
- マメ科の一年草
- 8～9月ごろ、黄色の蝶形花を咲かせる。
- 受精後、子房柄が伸びて、土にもぐり、地中で豆果を結ぶ。
- さやの網目が、細かく、きれいになると収穫。

- 5～6日ほど天日干し。野積みをして、完全に乾かす。
- 種子をしぼる落花生油は、食用のほかに、湿疹やかぶれの軟膏の基剤などに用いられている。
- 落花生には、コレステロールを下げる働きがあり、動脈硬化の予防に役立つとされる。
- ビタミンEがホルモンバランスを整えるので更年期障害に効果的。
- 落花生は、肝臓でアルコールの代謝を助けるナイアシンを含むので、お酒のつまみなどに適している。
- おかきとピーナッツは、最高のバランスをもつ傑作だと思う。
- スイートピーナッツと、ピーナッツを発芽させたもやし。ビタミンB群を多く含み、豆と茎との食味がことなり、甘く濃厚な味。
- 外地に住んでいたころ、日本の野菜がなく、植木鉢で育てたりしていた。
- 思いついてピーナッツのもやしを作ったことがあった。
- さっとゆで、オリーブオイルとレモン、塩、コショウかドレッシングでさっとあえる。



- アペリティブの時間に集まってきて下さる外人さん達にふるまい大好評だったことを思い出す。

森岡・今泉

「三河アララギ」について

◇三河アララギ発行所 〒一四一・四〇〇三三

東京都北区王子本町一・二六・六・A

TEL (〇三)五九二四・二〇六五

◇URL <http://imaizumiyuri.jp/>

E-mail yurimaizumi@jcom.zaq.ne.jp

◇編集・発行 今泉由利・森岡陽子

◇三河アララギ誌は毎月発行します。

◇会員・今まで会員の方。希望される方。

◇会費制 廃止。

◇新しく購読を希望される方 一ヶ年五千円。

◇振替口座 〇〇八三〇・六・五六二二九

◇原稿送付先 〒一四一・四〇〇三三

東京都北区王子本町一・二六・六・A

◇原稿は毎月末日までに郵送下さい。